

# 青山かぎ

判治泰蔵

陽が高くなってきた、潮止まりなのである、船着場に舫つてある船と船とのわずかな隙間に投げ入れた白い釣り糸の動きが、なくなってしまった。

朝のうちは、左手の小高い山裾に覆い被さるように迫つて見えた雪をかぶつた富士の姿が、心なしか霞んできて、錯覚であるうか、ちよつと遠のいたように思える。少し前まで時折冷たく感じていた風も殆ど無くなり、蜜柑山に囲まれた入り江は暖かく心地よい。

東京駅を早朝五時過ぎの静岡行き電車に乗った。桜の咲き始めるこの時期、シートには未だ暖房が良く効いていて尻が熱くなるように暖かい。四人掛のシートに足を投げ出して一眠りする。

七時半少し前に、沼津に着く。駅前から西浦線という路線バスに乗り、入り組んだ海岸線に沿つて駿河湾側を南へ下る。静浦、江の浦、三津などを経て、小一時間、この入り江に着いて、釣り始めると、八時半をとうにまわってしまう。

もう竿を出して二時間程になるが、まだ小魚が二つ三つ釣れただけである。気を取り直して、餌のイワシの切り身を針に付け直し、五メートルほど先の船の陰に投げ入れる。投げ入れた釣り糸がゆっくりと沈んでいく。餌が底に着く頃を見計らつて注意していると、動きが緩慢になった糸が、一瞬スツと小さく張つて止まった。すかさず竿を大きくあおる。すると船を舫つてあるロープを引つ掛けたような鈍重な応えが返ってきた。ただこの重さには鋭さは無いが動きがある。力を入れてリールを巻くと、徐々に上がってくる。始めは鈍い動きもあつたが、すぐに大きなゴミを引つ掛けたような感触に変わり、水面に姿を現したのは、餌を丸呑みにして大きく口を開けた二〇センチを超す本命のカサゴである。赤味を帯びた茶褐色で、身体のわりには尾びれは小さいが、逆に胸びれは大きく、腹は、ふつくらして太っている。大きくなると四〇センチ程に育つそうだが、こういう入り江の浅い場所では、二〇センチを超すのは珍しく、体高もあり、すこぶる大きく見える。針を外し、そつとびくに入れる。

この入り江は、西伊豆の付け根の部分に位置している。長く駿河湾に突き出た大瀬岬に抱かれた懐のある内浦湾の一部である。北西側が広く空いており、正面に富士が見える。従つて富士おろしと言われる北風は防げないが、東や南の風は、伊豆半島の山々で遮られ、やや西よりの風は、小高い蜜柑畑の丘陵でガードされている。特にこの木負のあたりは、穏やかである。海面には無数の筏がひしめき合い、ハマチそしてアジの養殖が盛んである。この船着場の船の殆どは、その世話をする船であり、養殖用の餌のおこぼれに、魚が寄つてきているのである、あれこれと魚影の濃いところである。又この船着場に限らずこのあたり一帯には砂浜は無く、国道に沿つて続く海岸線は、切り立つ

た崖と大きなゴロタ石と言つてもいい。従つてこの石まわりにも餌などが豊富な筈で、カサゴなどが潜んでいる。

春たけなわのこの頃になると、西伊豆は、むしろ初夏を思わせるように暖かい。周りを取り囲む青味を帯びてきた山々と、その影を映している水面も穏やかで、ゆったりしている。国道を歩き来る車を除けば、何もかも急いでいない。

今、確かに釣竿を持つて釣りをしている。カサゴを釣りたいと念じている。緊張している筈である。が、何故か、何としても釣りたいという気持でもない。どこか落ち着いている。せかせかしていない。妙な苛立ちも、猜疑心も、妄想も無い、鷹揚な、むしろ眠気を催すような時が流れていく。

右手の入り江に注ぐ川の浅瀬に、いつの間にか、土地の女子供が集まり、一塊りになつて貝を拾っている。その腰をかがめた姿が、水面から立ちのぼる陽炎に時折ゆれている。

我に返り、ふと横を見ると、いつの間にも現れたのか、背の曲がりかけた老人が、船溜りに吊るしてあるびくの中をのぞき込んで、

「ほう、いいカサゴが入つとるな……」

と言つて、近寄つてきた。船と船との近くに投げ入れてある糸を見て、

「こんな近くで、こんなのがのう……」

と、横にしゃがみ込んで、ぼそぼそと独り言のように、話をしてくれた。

この西伊豆では、春の訪れは早く、四月に入ると、木々の新芽が一斉にふき出し、周りの小高い山々の表面が、うつつすらと刷毛で一塗りしたように、淡い緑色に染まり始める。そしてその頃に捕れるカサゴを青山カサゴと呼び、一年中で一番美味しいとのこと。しかしカサゴは、今でこそ漁るが、この老人が若かった頃は、この湾はタイなど値のほる高級魚の良い漁場であり、自分も腕の良い漁師の一人で、漁が終わると船を仲間と競つて沼津へ走らせ、遊びに行ったとのこと。

昔を懐かしんで遠くを見る海やけた目はどろんと濁り、心なしか焦点も合つてなかったし、沼津の方向を指さす指先も細かい震えが止まらなかつた。ただ若く盛んだつた頃の話をするときには、一瞬そのしわだらけの顔に生気が、よみがえつたようにも見えた。

徐々に潮も満ちてきて、魚にも活性が出てきたのであろう。ぽつぽつと、カサゴが針がかりし、五つ六つ、びくに納まつたが、背後の大きな木の陰も、いつの間にか、長くなり、足元まで迫つてきた。何となくひんやりとした風が、襟元を通り過ぎていった。

一時間に一、二本しか無い沼津行きのバスに乗つて帰途に着く。左側の席に座ると、ずっと海沿いである。連なつて見える岬や丘陵も、この一日で一層青味が増したようだ。

淡島を過ぎると、駿河湾が大きく広がる。穏やかだつた水平線が少し風が出てきたからであろうか、キラキラと細かい黄金色に染まりつつあつた。